カスパル資料

**マスコミ宛て文書**

静岡市政記者会　加盟各社御中

　私たちは、アジアの児童買春をなくすために活動しているグループ「カスパル」です。

　昨年末、静岡市の中央図書館に、買売春奨励のガイドブックになりかねない―と議論を呼んだ本「タイ買春読本」が置いてあることに気づきました。この本については、新聞などでも取り上げられましたので、内容、問題点など知られていると思います。

　私たちは、こうした書籍を市民の税金で購入するべきではない、さらに公共の場で、広く青少年の目にも触れる場所に置くべきではない、と考えて図書館に善処を求めました。

　図書館は、開かれた開架書庫からは外す対応をしてくれましたが、本の廃棄処分はできず、閉架書庫に置いて希望者には貸出を続けるとのことで、完全廃棄を求める私たちの要望は容れていただけませんでした。

　また今後、こうした書籍の購入に慎重であって欲しいとの希望についても十分な返答をいただけまぜんでした。

　こうした書籍の存在についてはさまざまな意見があることは承知していますが、市民の税金での購入、公開については納得のいかない気持ちです。記者の皆さん、市民の皆さんに判断していただきたいと考えて、資料を準備しました。以下、一部は手書きですが、資料を読んでいただきたいと思います。

問い合わせはカスパル（アジアの児童買春阻止を訴える会）静岡事務局まで。

11/14 　中央図書館に「タイ買春読本」が置いてあることに気付く。

12/12 　カスパル静岡のメンバーと、中央図書館の「タイ買春読本」について話し合い、図書館になぜ問題となっている本を置くのか、など話し合いに行くことを決める。

12/15 　中央図書館に「タイ買春読本」が置いてあることについて、話し合いに行く

カスパル

　本の内容は買春を煽るものであり、児童買春の悲劇をも助長してしまう。青少年の育成にも害になる。タイには職業を選べない、貧困の中にある女性達、子供達が多い。日本国内でも、タイでも、この本に対して怒りの声があがっている。図書館に置くべき本ではない。

図書館

　新しい本は、新刊情報により内容のチェックはできないで入れている。この本については、次回の選書会議で話し合ってから対策を解答する。

12/27　 中央図書館より連絡があり　話し合いに行く。

図書館

　この本は改訂版で、いろいろな団体からの抗議文も載せている。資料的な価値はあるので、閉架書庫に置きリクエストがあれば貸し出す。図書館は　中立の立場で、本をよく利用するか悪く利用するかは、読者が決める。

カスパル

　売春宿のガイドブックであり、女性達の写真まで載せているこのような本を、たとえ閉架書庫であっても図書館に置くべきではない。図書館の本は　税金を使って市民の為に購入するものであり、このようなジャンルの本に関しては、内容のチェックをしてもらいたい。

カスパル　(CAmpain to Stop the Prostitution of Asian children and to ptrotect their Rights)

CASPAR　アジアの児童買春阻止を訴える会

**れんげ畑Ｎｅｗｓ　Ｎｏ150　　1996.1.17**

　昨年１２月、「タイ買春読本」が市立中央図書館にあり、カスパルでは２階の話し合いをしましたが、私たちの意見は聞き入れられず、今でも本は貸し出し可能です。買春を斡旋、紹介する本なんて図書館はもちろん、どんな本屋さんにも置いてほしくありません。今までの調査では、この本が置いてある図書館は静岡市一つだけです。なんかへんですね。

**れんげ畑Ｎｅｗｓ　Ｎｏ151　　1996.1.24**

カスパル氏への反論　図書館に『タイ買春読本』があるのはいいことだ！

　カスパルの方々は、自分で『タイ買春読本』を読み、「この本はひどい」と判断されたのでしょう？　自分たち以外の人間には判断能力がないから、指図してやらなくちゃなんて、まさか思っていないでしょう？　だったら、他の人にも、自分で読んで確かめて！と言うべきです。

　「偉いヒトが言ったから」とか「新聞に書いてあったから」とか「みんながそうしているから」とかいう理由でなく、自分で読み、調べ、考えて判断するのが、よりよいやり方だと思いませんか？

　だから気軽に資料の調べられる図書館に、『タイ買春読本』や麻原彰晃の書いた本や〈アウシュビッツのガス室はなかった〉という記事の載った雑誌があるのは、いいことなんです。

図書館の蔵書から自分たちの気に入らない本を追放しよう、とうい動きは、戦前も戦後も繰り返されてきています。つい数年前には、世田谷区の区議が、「行政を批判している本を公共図書館におくとは何事だ」と、住民運動の本を除籍させようとしました。

　こうした運動に加わり、焚書リストにもう１冊付け加えることが、あなた方の運動にプラスになるでしょうか。それよりは、「図書館はいろいろな立場の本を幅広く収集する。誰でもが自由にそれを読み、自由に評価を下すことができる」という原則を守った上で、「こういう評価が適切だと思う」というあなた方の意見を広めていくのが、より根源的な運動になると思います。

**タイ買春読本訴訟準備会よりカスパルあて文書**

カスパル事務局御中

タイ買春読本訴訟準備会一同

去る2月1日、9日および13日に、タイ買春読本訴訟準備会（以下準備会）の定例会がありました。1日の席上で、1月12日の毎日新聞地方版記事、1月16日の日本経済新聞夕刊記事および貴会の要請文を検討しました、また、13日には、20日に図書館と話し合いを持たれるご連絡も受け取りました。要請のありました対と行動および準備会の近況をご報告します。

私たち準備会もこの本につきまして、貴会の見解と何らかわるところはありません。まら、この本が『野放しの状態で』購入したり増刷したりできないようにあらゆる努力をする所存です。

私たちは、この問題に拘わって来たものとして、図書館でこの本や問題に拘わっているところに、私たちの対データハウス交渉活動の記録やタイでのＮＧＯの活動の記録などの元資料を送りたいと思います。また、そうした図書館が本を収書するのであれば文化・自然から社会状況まで、さまざまな角度から幅広く集めるように訴えるつもりです。そしてその中で、この本がどれだけ陳腐で差別的なものであるか、また、この本が具現している買春社会ニッポンの構造を、それぞれの図書館を利用するすべての人と共に考えていこうと思います。

実際問題として、『買春』『ＳＥＸ』といった文字の入った図書をえてして図書館は嫌います。クレームなどに拘わりたくないからです。そう言った点においては、静岡市立中央図書館の採った行動は珍しいことと言えましょう。

しかし、この本を1冊だけ置いて、クレームが来たから書庫に引っ込めるだけでは何の意味もないと思います。かえって、偏見を助長するだけの結果になりましょう。まだまだ静岡の図書館の理解は浅薄であると思います。だからこそ、元資料を提供し、これまでの事情を理解させ、さらに、その利用者に売買春問題も含めて真の理解をしてもらえるような図書館になってもらわなければ困るのです。もし必要とあらば、出掛けて行き話し合いましょう。そしていつかそこでタイと日本の問題のシンポジウムが開けるくらいの図書館になってもらいたいものです。そのためには、私たちができることからやっていこうと思います。

2月17日現在、日本図書館協会の山家氏、図書館問題研究会の西河内氏から依頼があり、一部資料を送りました。山家氏は2月20日にそちらにお伺いするとのことです。私たちは同じ20日に西河内氏と話し合いを持ちます。

『図書館の棚を飾るような本を作るつもりはない（出版幻想論での鵜野社長のインタビュー）』『売れなければ意味がない』『売った後は買った人の勝手』と言っているデータハウスに対して、図書館からの本の撤去はそれほどのダメージにはならないと思います。むしろ『後腐れなく片付けてくれてかえって好都合、熱りが冷めたら手を変えてまた出せる』とほくそ笑むことでしょう。私たちは、言論の自由や出版の自由を僭称して、人権を踏みにじるようなまねを許す訳にはいきません。だからこそ、遠回りではありますが、『買春読本』を批判するために存在させることが必要であると考えます。

ある雑誌の論説で、50年たった今もなぜ非難されなければならないのか、という記事が載っていました。これは、戦争を『自分の負の遺産』として、引き受けようとしない査証でありましょう。この本の問題を『自分の問題』として引き受けるのならば、例えば、海外の友人たちから尋ねられたとき、このような本の存在を許してしまったことを自分の痛みとして思い返すでしょう。本当に恥ずかしいと思うならば、切り捨てる路を選ぶよりも、この問題を考える場や仲間を増やし、一方で、私たち自身も批判されることで、自分のたどってきた道を再確認すべきかと思います。

**図書館あて廃棄要望文書**

静岡市立中央図書館長

中西敏夫様

　私たちは下記の団体とともに「タイ買春読本」の廃棄処分を求めます。

　２月１７日、アイセル２１にて「タイ買春読本」の蔵書の是非を問う、公開討論会が行われました。そこで、この本に出ている心身ともにボロボロになった女性が、この１冊の本が図書館にあることで、これ以上どんな被害を受けるでしょうか、という問いかけに対し、日本人が加害者となり、同じ過ちを繰り返し．この女性と同様の被害を受ける女性をふやすおそれがある、というやりとりがありました。

　「タイ賀春読本」はタイにおいて行われている、犯罪である売春を、無批判に肯定、奨励しています。そして、日本社会のモラルを低下させるばかりか、世界における日本の評価をも低下させます。

　タイでは、生活に追われ、追いつめられて職業を選べず、売春に従事する女性と子どもがたくさんいます。売春がもとで傷つき、あるいは病気になり、命を落としていく幼い子供たちや女性たちもいます。また、タイにおける売買春の被害の８０％は日本人によって引き起こされているといわれています。

　このような現実の中で、この本は、タイの女性たちの尊厳を深く傷つけるばかりか、同様の行為を、さらに広げ、繰り返させるおそれが非常に高い本です。

　昨年の１１月、タイ国会議員ラダワン・ウォンスリウォン女史が講演のため来日されたとき「タイ賀春読本」の著者および関係者に直接面会され、貧しい地方の女性や子どもたちが売春婦になることのないよう、親や回りの者たちに売られることのないよう、学校教育、その他によって懸命に対策に取り組んでいることを切々と話され、タイ国へ女性を買いに行くことを奨励するような本は販売しないで欲しいと話されました。

　しかし、彼らの返答は「日本の男性がタイ女性と出会うことはラッキーなことで、大いにこの本を活用してタイヘ行くことを勧める。そうすることが．タイ経済を肋けることになるから」でした。これはあまりに思いあがった発言です。

　タイ国会議員に対してのこの発言は、タイ一国に対して大きな侮辱を行ったことになります。私たちが今、彼らの発言を聞き流して「タイ買春読本」を売らせたり、図書館に置いて貸し出すことは、日本国民がタイ国を侮辱していることになるでしょう。

　今、本の出版を止めることは私たちにできませんが、本を選択することはできます。「いらない」と表明する自由は守られるはずです。

　図書館は、この本に資料的価値を認めていますが、一人の人間を人道的立場に立って擁護することが先決だと私たちは考えます。資料収集の自由より、人を守ることを尊重し、優先するべきです。

　少なくとも、図書館は「図書館協議会」において、見識者の方々の意見も聞き、再度、この本を蔵書とすることの是非を検討するべきではないでしょうか。

　この本に抗議を寄せている団休と、静岡市民団休が一致して、ここに「タイ買春読本」の廃棄処分を要望いたします。